



Title	少しでも来し方を振り返ってみる : 退職のご挨拶にかえて
Author(s)	上田, 功
Citation	大阪大学英米研究. 2018, 42, p. 1-9
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/99414">https://hdl.handle.net/11094/99414</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 少しでも来し方を振り返ってみる

－退職のご挨拶にかえて－

上田 功

私は2018年3月末日をもって、大阪大学を退職する。大阪大学と統合した大阪外国語大学に赴任したのが、1995年10月であるから、22年と6か月在職したことになる。ところが私は大阪外国語大学のアラビア語学科に入学し、卒業後英語学科に学士入学をして、その間にアメリカに留学し、さらに大学院まで実に11年間も学生として在籍したので、これを加えれば、33年6か月もの間、大阪外国語大学と大阪大学にはお世話になったことになる。33年と言えば、これまでの人生の半分以上である。これほど長きにわたって過ごした学舎、職場を去るにあたっては、何か特別の感情が起こるのではないかと思っていたが、不思議と感慨は無く、淡々とした気持ちでいる。これは大阪外国語大学と大阪大学が、自分の中ではすでに精神の一部として消化されているからだと考えている。つまり空気や水のように当たり前の存在であるということなのであろう。

「月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり。」と言うが、人間は永遠の過客ではありえず、還暦を過ぎると、自分の未来に限りがあるということを経験する。最近、同窓会がよく開かれるようになった。人間若いうちは毎日を生きるのに精一杯だが、年をとると、過去を振り返りようになるし、公私ともにその時間的余裕も出てくる。人は過去に戻って、自分の生きた証を求めるのであろう。ところが私にはまだやるべきことが残っているので、前を向いて歩かねばならない。過去に生きるわけにはいかないのである。とは言うものの、人間の未来は現在の延長線上にあり、その現在は過去

の上に成り立っているのです、この機会をお借りして、来し方を振り返っておくのも悪いことではなかろう。

私は豊中市刀根山の生まれで、現在の研究室がある大阪大学豊中キャンパスから、歩いて30分くらいのところに実家がある。九州出身の父は建築技師であったが、その家系は鉄道と関係する仕事が多かったという。父にとっての美德とは、体を動かして働くことであった。母方は秋田の出で、その時代にはめずらしく、母は女子大の英文科まで出ていた。彼女はアカデミックなことに理解があり、好きなだけ本を読ませてもらって育った。高校時代はちょうど学園紛争が終わったものの、まだその残り香が漂っており、受験体制は悪であるという雰囲気の中で、自由に学び、語り、スポーツもした。英語は好きだったが、古文や漢文の方がもっと好きであった。大学受験が近づき、志望校を決める段になって、進路指導では大阪大学の英文科を薦められた。しかし自分としては、高校でかなりのところまでやった英語よりも、まったく別の言語を学びたかった。また上述したように、自宅は大阪大学の近くにあって、大阪大学の雰囲気が何となく自分に合わないように感じた。（その私が今大阪大学の教員となってこれを書いているのであるから、運命とは面白いものである。）結局一期校を含め、いくつか合格した大学から、二期校であった大阪外国語大学のアラビア語学科に入学した。

高校生は大学の語学に対して、それを少し勉強すれば、すぐに使いこなせるようになって、世界とのコミュニケーションの扉が開く、というイメージをもって入学する。そのイメージは授業が始まってすぐに打ち砕かれた。アラビア語は高度に屈折し、非線状的な形態構造を持つ。毎日が単語やその複雑な活用の暗記で暮れていった。定期試験では徹夜の連続であった。しかも先生方はフランス語やドイツ語のテキストを容赦なく使われた。辛い4年間であったが、アラビア語だけではなく、ヘブライ語（聖書と現代の両方）、ユダヤアラム語、古代シリア語、アッカド語、そしてアフガニスタンのパシ

ユト語などのクラスを取った。大阪上本町のとても大学とは思えないような狭い学舎の劣悪な教育環境の中で、中東の文化に触れながら、まだ見ぬ彼の地に思いをはせていたのであった。

ちょうど当時は石油ショックの直後で、アラビア語学科を卒業していれば、大げさではあるが、どんな会社にも就職できた。事実、何の就職活動もしていないのに、大手商事会社からお誘いをいただいた。しかし自分は商社に入って、ビジネスで世界中を飛び回るというタイプではないことがわかっていたので、卒業後は高校の英語教員になるつもりであった。そのためには、いくつかの教職科目も取り残していたので、I 部（昼間）英語学科に学士入学をした。当時主任は林榮一先生で、授業では森塚文雄、金山崇、田川弘雄、笹井常三、舟阪晃の諸先生に教えていただいた。松田武、内田憲男、斉藤隆文の先生方は赴任されて間もない若手であった。当時は英語に関する学問が細分化されていく時代であったが、まだ旧外国語学校の雰囲気を残していた。大学は箕面に移転し、大きな変化のただ中にあった。私は相変わらず、ルーマニア語やフィンランド語、そして古英語や中英語などを学んでいたが、私自身にも大きな転機が訪れる。文部省の学術交換派遣留学生に選んでいただいたのである。もとより留学などはあまり考えていなかったが、これが無ければ、今歩いている道へは進んでいなかったであろう。留学先は学術提携校であった、米国のウィスコンシン大学ミルウォーキー校であった。何も考えずに選んだ留学先であったが、そこには英文法の Sydney Greenbaum、英語史の Robert Stone、言語類型論の Edith Moravcsik、第二言語習得の Fred Eckman など、様々な分野の第一線で活躍しておられる先生がおられ、授業では本場の言語学研究の一端に触れることができた。その代わり、この一年間ほど懸命に勉強したのは、後にも先にも経験がない。図書館の 24 時間オープンしている自習セクションで、深夜 2 時、3 時まで予習をし、アサインメントに取り組み、それが終わると 100 メートルほど離れた寮に帰るのであるが、冬は氷点下 10 度以下に気温が下がる土地なので、空を見上げて杲杲と星が輝いていると、明日もまた寒くなるなど、フッと白い溜息を

出しながら雪道を歩いたものだった。部屋に帰って、湯を沸かして日本茶を飲んで、日本に手紙を書いたりしてベッドに入り長い一日を終えた。

具体的に私の研究者への道を決めたのは、Fred Eckman 先生の Applied Phonology という授業であった。当時から音韻論には興味があったが、Phonology というまさに「音韻論」は別に開講されていた。とにかく音声に関する授業はすべて取ってみようと、Applied Phonology に出てみた。すると、この授業は生成音韻論を用いて、幼児の構音障害や成人の外国語訛りを分析する文字通り音韻論の応用であり、Speech and Hearing Sciences と Linguistics の共同開講科目で、言語聴覚士志望の学生には必修科目であった。それまで「障害」や「訛り」というものは、本来の体系が壊れるものだと考えていたが、分析対象のデータを見ると、逸脱発音にはそれ自身のはっきりとした規則性が見て取れた。それで、このような分析を日本語でもやってみて、対照研究をすれば、人間の発音逸脱の限界がある程度わかるのではないかと考え、結局そのような研究を今現在まで続けている。留学中にお世話になった先生方とは今も交流が続いており、学会の特別講演をお願いしても、気軽に引き受けていただけるのは有り難いことである。

博士まで続けたらどうかという有り難いお誘いもいただいたが、1年後に帰国し、大阪外国語大学の大学院に進んだ。音韻発達や障害は日本の言語学畑ではまったく研究されていなかったのも、まず日本語について研究を始めた。臨床現場で働いておられる言語聴覚士の方々にお話を聞いたり、構音訓練を見せていただいたり、データを提供していただいたりして、一步一步手探りで進んでいった。就職はというと、当時はバブルのような状況で、修士を出てすぐに私立大学の助手に採用され、約5年間勤めた後、国立の静岡大学に移動した。部局は教育学部の英語学講座で、教員養成が主たる使命である。もっともその頃には、教員養成課程を卒業しても教職に就かない学生が増えており、どの教育学部もゼロ免課程と呼ばれる、教職免許取得を卒業の必要要件としないリベラルアーツ的な学科に定員を振り分けており、教員

養成課程の授業科目をゼロ免課程では別の科目名を冠して読み替えるなど、問題が顕在化してきた時代であった。文科省の教養部解体と相俟って、「自己点検・評価」や「将来構想」などの委員会がどの大学でも設置され、教員の事務量が雪だるまのように増えていった時代である。両方の課程を担当していたので指導学生も多く、懸命に働いた。ただ教育学部はミニ総合大学であるので、自分とは違った、理科系や芸術系の優秀な同僚と語り合えたことは貴重な経験であった。当時はまだ30代の若手であり、まだ大学教育に理想があり、皆で夢を語っていた。

1995年10月に母校の大阪外国語大学に移るが、その少し前にまた大きな転機があった。それまで、院生時代には論文を院生主体の内輪の研究誌に投稿し、学会発表は地区の学会でおこなっており、職に就いてからは、学部の紀要に投稿し、全国規模の学会で発表をおこなうという、よくある過程を辿っていたが、一度思い切って国際学会で発表しようと思ったのである。これはひとつには、発達や障害の研究は、複数の学問領域でおこなわれているが、それらの間の壁が高く、他分野の研究者に意見を求めるには、複数の領域が一同に会する国際学会しか機会がなかったという事情がある。ともかくも応募して、採択の通知が来て、準備をしてニューオリンズに向かい、何とか発表をこなしたが、世界の最前線で活躍しておられ、それまで名前でしか知らなかった研究者の方々から、好意的なコメントをいただいたのは、意外であった。（もちろんよくないところは厳しく指摘された。壇上で卒倒するかと思うくらいに。）その学会で発表を聴いていたカナダのブリティッシュ・コロンビア大学の先生から、翌年に開かれる専門家だけの（closedな）国際会議に誘っていただいた。その会議はその道の専門家の前で、ひとり40分間発表して、30分質疑応答をするという想像を絶するものであったが、これも何とかこなすことができた。幸いどちらの発表も活字化されているが、このふたつの発表が私を海外へと誘う自信となったのは間違いない。そしてどの学会でも出会いがあり、知り合った様々な国の研究者と、今も良い関係が続いている。

大阪外国語大学に着任してからは、時間が速く過ぎた。学部は国際文化と地域文化の二学科になり、昔のⅠ部とⅡ部は昼間主と夜間主に姿を変えていた。大学院も後期課程の設置審査を受けているところであった。学生時代にはいい加減であった卒業研究の指導も、3,4年にゼミに属し、担当教員に卒業論文を提出する制度になっていた。これにより教員と学生との距離が近づいたような気がした。私には、アカデミックな教育もしつつ、語学教師としても英語を教えるという二足の草鞋を履くことがまったく苦にならず、まことに大阪外国語大学は、自分の性分にあった職場であったと言える。また1997年春から1年間、フルブライト交換研究員として、音韻獲得のメッカであるインディアナ大学で研究できたことは、自分の研究にはずみをつけることになった。フルブライト研究員など、昔はとても縁のないものと考えていたが、時間をかけて書き上げた、とてつもなく大部の願書を評価してもらったことで、私は努力すれば必ず報われるという信念をもつようになった。ところが、40代の後半にさしかかったあたりから、私は体調不良に悩まされるようになる。大学法人化に伴ってコンスタントに増え続ける校務に加えて、数々の学会でさまざまな委員に任ぜられ、また日本学術振興会や大学入試センター等の仕事も重なった。ついに2004年と2005年に連続して大病の手術をすることとなった。私は50歳になっていた。そして大阪外国語大学は大阪大学と統合することになり、その時に専攻語代表と講座主任が回ってきた。私は専門領域の関係で、大阪大学の言語文化研究科の言語文化専攻所属になったが、外国語学部の仕事はそのまま、旧課程の学生も残っており、やるべき事が多くあった。外国人教師のトラブルや人事、学生の問題に頭を悩ましている時に、古くからの友人にして同僚であった田尻雅士君が急逝したのが、痛恨の出来事であった。

大阪大学との統合は、最初は何かとぎくしゃくしていたが、だんだんと事がスムーズに運ぶようになってきた。統合前の約束と違うなどと、会議で声高に叫ぶ人も無くなってきて、それなりに大阪大学の一部に溶け込んでいっているように思う。英語専攻に入学してくる学生も、統合当初はやや毛色が

異なった学生もいたが、現在は総じて英語好きのかつてのタイプが多いように思う。大阪外国語大学の名が消えることについては、諸先輩方から、せめて大阪外国語大学の DNA は残して欲しいとよく言われた。具体的にこれをどの様にしたらいいか難しいところだが、とにかく中にある外からであっても、大阪大学の外国語学部が存在感をもたれるようにすることが重要であろうと思い、英語に関するものであれば、他学部であれ全学であれ、頼まれた仕事はすべて引き受けた。また全学や大学院の英語教育の改革にも関係している。大学全体の英語レベルを引き上げるには、相当の時間がかかるが、若い人達が後を引き継いでくれて、将来、何とか大阪大学の学生が個人の人々の必要性に応じて、それなりの英語運用力を修得できるようなシステムができれば、大阪外国語大学英語専攻の DNA を残せたことになるのではないかと考えている。また世間では、大学を研究の内容やレベルではなく、入試を通して見る向きが多い。だから入試業務でミスがあると大きな問題になるのである。私は統合からの 10 年以上、毎年必ず入試業務に深く関わってきた。受験雑誌などの評価を見ると、外国語学部の英語入試問題は高く評価されている。こちらの求める学生を選抜することができる適切な試験問題を作ること、われわれの大切な仕事である。入試に係わる仕事は辛いものであったが、これまで大きなミスもなく責任を果たしてこられたのは幸いであった。

2011 年から、大阪大学を基幹校として、金沢大学、浜松医科大学、千葉大学、福井大学の 5 校からなる連合大学院小児発達学研究所と未来戦略機構リーディング大学院「超域イノベーション・プログラム」を兼任することになった。前者は音韻発達や言語障害という自分の研究領域と関係し、オムニバス形式の授業を担当し、他の 4 校にテレビ配信し、また求められれば、博士論文を書く学生に助言などを与えている。後者は修士課程に入学した学生をさらに選抜し、5 年間でそれぞれの専門だけではなく、分野横断的な知識や文理融合の思考方を鍛え、さらに問題解決能力やコミュニケーション能力



をつけて、将来社会の様々なところでリーダーとなるような人材を育成するプログラムであるが、リーダーには英語運用能力が不可欠と、私に白羽の矢が立ち、言語に関するすべての責任を負う立場になった。これは新しいプログラムで前例もなく、教学のみならず、人事や予算のことにまで係わらねばならなかったが、全学から選ばれた担当者の方々は非常に優秀な方が多く、また仕事を通して大学の組織や運営を垣間見ることができ、大学人としては成長したと考えている。反面、このように複数の部局の掛け持ちをしたので、豊中、箕面、吹田を行ったり来たりすることが多く、何か落ち着かなくなったのは残念であった。またこのような仕事が増えたことにより、英語専攻の学生や指導院生のための時間が減り、研究時間も明らかに削られたが、研究対象として、方言音声や英語のイントネーションの習得、また商標登録に関する音韻論的な考察、さらには引き受けた学振ポスドクの研究分野であった、幼児の難読の問題などに研究対象が広がったのは、喜ぶべきことであった。また時間を見つけて、何とか学会発表や論文の投稿を続けられたのも、生来怠け者の自分としてはよくやれた方だと思う。研究者としては、これまで山あり谷ありであったが、前述したようにその時その時の状況下で、できるだけ努力することを自分に課したのがよかったと思っている。またこれまで自分の研究の質が大きく変化したことがあったが、それは学生時代の留学であり、初めての国際学会での発表であり、フルブライト研究員としての渡米であり、いずれも思い切って外国に出たことが転機となっている。現在、我が国の人文学が衰退しているとよくいわれる。日本には不思議な翻訳文化があり、何でも日本語ですまそうとする伝統がある。母語を大切にすることは言を俟たないが、研究は成果を最大限に専門家によって評価されることが求められるので、人文学分野でも、英語で海外に発信することが求められる。

長々と書き連ねてきたが、ここまでなんとかやってくることができたのは、恩師、同僚、そして学生の皆さんのおかげである。特に英語専攻のスタ

ツフの皆さんには万事が中途半端な私を見捨てることなく、常に助けていただいた。英語専攻は不思議なところで、会議も最小限で、直接の同僚としては、顔を合わせることが非常に少ない。ところが何か問題が起こると、誰かが適切に対処して、知らない間に問題は解決してしまう。顔を合わせずとも何か通じ合うものがあるのだろう。われわれを結びつけているもの、それは無形の「英語」というものだとは私は思っている。このような繋がりを大切に、これからも英語専攻語はますます発展していただきたいと切に願う。新生の大阪大学外国語学部がその真価を問われるのは、どれくらい優秀な学生を社会に送り出すかで決まる。今後は卒業生が社会で活躍するのを楽しみにして、外から大阪大学を応援していきたい。

最後にもう一度、改めてこのような惜別の一文を書く機会を与えて下さった英語専攻のスタッフの皆様に心からお礼を申し上げる。

皆様、有り難うございました。どうぞお元気で。

2018 年 1 月